

子どもの体験にどう関わるか

青山 鉄兵（文教大学）

子どもの体験を考えるための前提

◇体験活動への社会的な注目

- ・子どもが育つ環境（生育環境）の変化（「サンマ」と「メディア」）
- ・子どもの「体験不足」という指摘 cf.近頃の子どもたちをどう見るか？
- ・体験を通じて育まれるもの、への期待
 - 「百聞は一見に如かず」
 - 知識以外の資質・能力への注目
 - 思い通りにならないことの価値
- ・「自然にできるもの」から「わざわざ体験させるもの」へ
 - 体験の意図的・計画的提供が求められるようになった
 - 「体験」と「体験活動」の違い
 - 体験活動：教育的に組織化された体験 ※本人の意図の有無
→具体的には、自然体験、生活文化体験、社会体験など
- ・「わざわざ体験させる」ことによって生じる課題
 - 体験を通じた「格差」の解消
 - 教育的な「わざとらしさ」をめぐる問題

より良い体験のために～大人の関わり方を考える～

◇「体験」を体験させることの難しさ

- ・何を体験させるべきか？
 - 「体験じゃないもの」なんてない
 - 「させるべき体験」と「させるべきでない体験」の違いは？
→体験をすると何がいいのか（どう評価するのか）？
- ・どうやって体験させるべきか？
 - 提供したい体験との距離 ex)農業体験
 - 教育的であることの限界 ex)「この遊びが終わったら本当に遊んでいい？」
→大切なのは体験「すること」ではないはず
→「何をするか」よりも「何のためにするか」が大切
→活動の結果ではなく、プロセスに注目すること

◇支援者にもとめられる2つの視点：「教育的であること」と「教育っぽくないこと」

- ・教育的意図にもとづく体験のデザイン
 - 「何のためにするか」にもとづく体験のデザイン
 - プロセスに働きかける「かかわり」 → 支援者に求められるスキル

- ・ とはいえ、教育的な意図だけでは不十分
 - 放課後を学校の延長にするのももったいない
 - 体験の全てを組織化できるわけでもないし、すべきでもない

- ・ 支援者側のポイントになりそうなこと
 - 子どもの興味にもとづくこと
 - 活動を詰め込みすぎないこと
 - 予定通りにこだわらないこと
 - 「すき間」を大切にすること
 - 支援者自身が楽しめること
 - ときどき悩むこと

◇コロナ禍での体験活動のあり方

- ・ コロナ禍での体験活動の動向
- ・ 「遊び」や「一緒にいること」の価値～濃厚接触へのこだわり～
- ・ ソーシャルディスタンスはあっても「すき間」はない！？
- ・ これ以上、不信と分断を生まないために ～ガイドラインとの付き合い方～

[参考]

- ・ 青山鉄兵「「体験」と「体験活動」のあいだ～「体験の組織化」をめぐる問題～」『社会教育』2013-1, pp.20-24.
- ・ 青山鉄兵「体験活動の指導者に求められる2つの視点～「教育的であること」と「教育っぽくないこと」～」『社会教育』2017-9, pp.6-11.